

「百里見秋毫」の解釈をめぐって

松尾善弘

—目次—

まえがき

1. 訓読法の原理とその欠陥
2. 古漢語基本六文型
3. 「百里見秋毫」はどう訳すべきか

あとがき

まえがき

「見」字に拘り続けて四半世紀が経つ。一見、堂々巡りの遅々たる歩みではあったが、字義の闡明はもとより、この字が用いられた句構造の措定に至るまで、紛れもなく螺旋状に発展してきたと自負している。古漢語の中でも唐詩など韻文作品の読解に当っては、清朝考証学に代表されるような語義解釈に終始するのではなく、現代音韻学の研究成果、語法方面の研究成果を取り入れ「三位一体」の考察を進めねばならない時代に入っていると思う。

過去、筆者は幾度か標題のテーマに関する研究発表や講演会を開いてきたが、その都度、会場は解釈の賛否をめぐって侃侃諤諤の議論が沸騰したものである⁽¹⁾。筆者自身、右に左に揺れながら模索し続け、「見」字を軸とする研究生活を通して中国学会のありようを眺め、中国研究はいかにあるべきか、その目的、姿勢、方法そして大義名分に至るまで執拗に問い続けた。近年になってようやく手応えを感じるようになり、ささやかな研究成果をフィードバックする時宜を得たのではないかという感触を得ている。

「他人の時間を盗むことほど大きな罪はない」と言ったのは魯迅であったか。中国語と漢文教育を生業として30年、筆者は常にこの訓戒を胸に、いかにすれば学生に時間を浪費させない語学教育が出来るか、費やした時間を無駄にせず積み重ねのきく授業はどうあるべきかを求め実践をくり返してきた。

中国語教育で言えば、その第一の要諦は発音教育の徹底である。ただ、その重要性は万人の認めるところであるが、言うは易く行方は難し。発音教育の理論と実際はまだ理想にほど遠い状態

にあると言ってよい。

授業時間や学習時間が少なければ少ないほどポイントを押さえた発音教育を反復し、将来に備えて基礎を養成しなければならない。「発音を制する者が全てを制する」と言っても過言ではないのである。その到達点は「拼音」をスラスラ読み、書きとることのできるレベルであるが、筆者の経験では、早い学生で半年、遅い学生だと1年かかる。

中国語教育の世界でも親切ごかしの「単語解釈」教育が先行しているのが現状である。つまり、上記「三位一体」の中では最後に回してよい語義教育が先走り、語音や語法教育がなおざりにされているのである。語義が分かれば文の意味が分かるとする訓読の積弊がここでも根深く潜んでいる。訓読批判に先立って、即ち古漢語読解に先がけて、現代漢語の発音教育と語法教育に専念すべきことを主張する理由はここにあり、10年前、その実践の書を江湖に問うた⁽²⁾。

より早く無駄なく立派に現代漢語をマスターしてこそ、限りなく真正の古漢語読解に迫ることができる。漢字の字面を目で追って理解したと思いきわ時代は過ぎ去った。訓読法は簡便であり、「音読」より古漢語読解に勝れると言えは言うほど、では逆にかくも習得困難な現代漢語の関門を通らぬ古漢語理解とは一体何なのかという詰問がどこまでも追いかけてくることを覚悟しなければならぬ。

所用にかまけて学習の暇のない一般庶民が訓読法の利便性を活用するのと違って、苟も教壇に立つ者がいつまでも「漢文学」を隠れ蓑に、旧態依然の、いやそれ以下の訓読法の世界に埋没するなら、識者に「学問に対する冒瀆だ」と一喝されても致し方ないことであろう。

1. 訓読法の原理とその欠陥

言語の形態論的分類で、漢語は孤立語と呼ばれる。語尾変化や接辞などを有せず、各語はただ観念だけを表わし、文中におけるその位置によってのみ文法的機能を営む。よって位置語とも呼ばれ語順の厳格な言語である。その表記道具が漢字であり、わが国で使用される漢字の大部分が古漢語のそれと共通することが訓読法成立の原理を解く重要な鍵となる。漢字は原則として1字＝1音節＝1語で、昔から「形・音・義で成り立つ」と定義されている。アルファベット等の表音文字に対比して一般的に表意文字と称されるが、実は上記定義にある如く「蔵された形で音をも表わす」表語文字なのである。

一方、日本語は、実質的意味を持つ語や語幹に機能語や接辞を付けて、さまざまな文法範疇を表す性質を持つ膠着語である。両者の特質が組み合わせられて訓読法が成立する。

今、漢語の代表的な文構造〔主語S・述語動詞V・目的語O〕の例文「我・吃・飯」を基に日

中語の語法的差異を探ってみよう。

- ◎我・吃・飯 ←→ ○私ハ・食ベル・ご飯ヲ
×我・飯・吃 ←→ ◎私ハ・ご飯ヲ・食ベル
×吃・飯・我 ←→ ○食ベルヨ・ご飯ヲ・私ハ
×吃・我・飯 ←→ ○食ベルヨ・私ハ・ご飯ヲ
×飯・吃・我 ←→ ○ご飯ヲ・食ベルヨ・私ハ
×飯・我・吃 ←→ ○ご飯ヲ・私ハ・食ベル

語順を入れ替えた六型のうち、漢語は初めの一文しか成立しないのに対し、語の活用と接辞テニヲハ等との結合によって文意を示す日本語は六型全てが同一意味を表わす。但し、◎印が最も普通の文章であり、漢語の語順で言えば〔S・O・V〕である。従って、漢語の「我吃饭」をそのまま「私ハ食ベルヨご飯ヲ」と直訳してもよいのだが、漢語の動詞Vと目的語Oをレ点によってひっくり返し、語尾活用と助詞の協力を得て訓み下すと◎印の文になるわけだ。

古漢語原文（漢文）を日本語古典文（漢文）に変換する原理《訓読法》は、①原文が漢字で書いてあること。②語順を変えない漢語の最もポピュラーな〔S・V・O〕構造に対し、変幻自在の結合方式を取れる膠着語日本語を適応させ〔S・O・V〕に変換させる。③その際、送り仮名、ルビ、訓点の規範を定めたこと等によって成り立たせてきたことが分かる⁽³⁾。

古漢語「守株待兔」は「(農夫)・守・株／待・兔」〔(S)・V・O／V・O〕の連動式文である。目的語が漢字1字の場合、レ点を使ってひっくり返し書き下せば日本古文となる。「(農夫ハ)株ヲ守リテ兔ヲ待ツ」

同様に「光陰如矢」は〔光陰S・如V・矢O〕だから「如」の左下にレ点を付けて「光陰(ハ)矢ノ如シ」と訓み下せばよいわけだ。

さて、本論で取り扱う李白詩の「観放白鷹」はどのように訓読すればよいだろうか。

先ず、漢文の基本構造は〔S・V・O〕であることを踏まえて、この詩題の主語と動詞と目的語を見極めることから始める。但し、漢文は主語の省かれることが多く、ことに韻文の場合は字数を少なくするためと動詞を見ればその主語が何者であるかはすぐ判るので、むしろ主語を省略する方が普通である。

即ち、「観（観察する）」のは李白本人であり、「放（釈放する）」のは鷹匠ないし飼養者である。すると、この詩題は〔(李白S)・観V・<O>〕となり、<O>の部分が更に<(鷹匠S)・放V・白鷹O>という〔S・V・O〕の二重構造になっていることが判る。

これに送り仮名と訓点を施した上で書き下し分に直すと、「(私李白ハ)／(鷹匠ガ)白鷹ヲ放ツヲ観ル」という日本古文に変身するわけだ。その時、二字熟語「白鷹」は音読して「ハクヨウ」、「放、観」は訓読して「はなツ、みル」となり、訓点は後半が漢字2字の熟語だから二点、前

半は1字ずつだからレ点で間に合う。

原則として二字熟語は音読し、漢字一字の場合は訓読することになる。訓点も長文になると更に上中下・甲乙丙・天地人などを使い、順次下から上へ返読することになる。

訓読法の最大の難点は、一旦誤読されてしまうと、それを発見・判定して正しい訓読に戻すことが極めて難しいことである。誤読どころか、皮肉な言い方をすれば訓読をごまかしの手段としている風さえ見えることである。以下、若干の実例で示そう⁽⁴⁾。

鳴箏金粟柱→(箏ヲ鳴ラシテ) 鳴箏、金粟ノ柱

林前看月光→林前 (×、ニ、ニテ) 月光ヲ看ル

花落知多少→花落ツル (ヲ、コト) 知 (ル、シヌ、リヌ、ランヤ) 多少 (×、ゾ、ヲ、ナルヲ)

故郷今夜思千里→故郷 (×、ハ、ヲ) 今夜千里 (ニ、ヲ) 思フ

伝不習乎→伝ヘテ習ハザルカ/習ハザルヲ伝ヘシカ

民信之→民コレヲ信ニス/民コレヲ信ズ

吾与女不如也→吾、女^{なんじ}ノ如カズトスルヲ与^{ゆる}ス/吾ト女ト如カザルナリ

子罕言利与命与仁→子、罕ニ利ト命ト仁トヲ言フ/子罕、利ト命ト仁トヲ言フ

誤読の原因は「漢字」そのものに負うところ大である。その証拠には中国文人もこの種の誤読を到る処で犯しているのである。しかし、それに輪をかけて恣意性の強い訓読法は頑固な師承の伝統と相俟って、訓読者自身の学のレベルをもの見事に露呈することになる。

昨今の訓読状況を鑑みるに、例えば全国の大学入試の漢文出題文で、漢字の字体、ルビ、送り仮名、返点の打ち方等で合格点を差し上げられるのは皆無と言ってよい。代表格の入試センター試験漢文問題文の訓読さえ間違いの多い実態は、それが現代日本トップクラスの中国研究者集団の所産であるだけに、筆者の慨嘆は深まる一方なのである。

古代漢語を日本漢文に間違いなく変身させるためには、漢字の意味(語源を含めて)はもちろんのこと、字体(旧体字、簡体字も)、原音、日本漢字音(呉音・漢音・唐宋音・慣用音等の字音、正訓・義訓・特殊訓等の字訓)、それに日本古典文法の知識をひっくるめた総力戦の心構えが必要なのだ。それを単に漢字の字面の理解のみで辻褄を合せ能事了れりと決めこんでいるのが残念ながら今日の「訓読界」の状況だと言ってよい。

『韓非子』の「守株待兔」する農夫が、旧套を墨守する頑迷な孔子を揶揄したものであることを、古来どれほどの訓読学者が説き明かしてきたであろうか。

猿おやじのペテンにひっかけり、実質は変らぬのに言葉でいいくるめられる猿どもが、実は利口な支配者にいいくるめられる庶民を諷刺した話であること(『列子』「朝三暮四」)を、古来どれほどの漢学者が闡明してきたであろうか。

『莊子』の「^{ひそみ}顰^{なら}に倣ふ」のエピソードは何のため、「葉公、龍を好む」の成語の実態は、「直躬」説話の逆転劇はどうして起ったか。……訓読法の継承にのみ汲汲として隠蔽された故事成語の紹介にさえ心眼を開けなかった学者の責任は、今後、誰が問い詰めていけばいいのだろうか。

2. 古漢語基本六文型

訓読法が、過去、漢文化を伝え広めひいては日本文化の先導者となった事実は否めない。しかし、近代化・グローバル化の進んだ現代において、その方法の非科学性・思想的保守性は覆うべくもない事実として眼前にある。中国古典の真理探究法としてそぐわなくなった方法論の不備を抉り出し、思想性の革新も含めて改善を求めて行くのは、現代に生きる中国学者の任務であるとさえ言えるであろう。

わが国の漢文学の新生を図るにはどのような手段が用意されるべきなのだろうか。

先ず第一に漢字の魔力に引き込まれないことである。漢字の二面性に着目し、その利便性のみ依りかかるのでなく、「四多六難⁽⁵⁾」を克服する方法を構築すべきである。

第二に、これまでの字形を中心とした漢字字源研究から字音中心の漢字語源研究へ重点を移して行くべきである。

第三に、漢語音韻学や漢語語法論等、現代言語学の研究成果や知識を応用すべきである。

第四に、何よりもこれからの中国研究、更には古漢語研究が虚学の楼閣とならぬ為に、より早くむだなく立派に現代漢語をマスターする教学法の開発・推進から手を打っていかねばならないだろう。

語序が固定していることに次いで重要な漢語の語法特徴は、品詞分類が文構造と密接不可分の関係にあることである。例えば「我在医院工作」の「工作」は動詞、「我做医院工作」の「工作」は名詞である。前者は介詞連語の挟まった動詞述語文の動詞、後者は〔S-V-O〕構造の目的語（名詞）になるからである。

これから古漢語基本六文型を措定するに当って、いくつかの注意事項を述べておこう。

①古漢語文法は現代漢語文法を前提にすることは言うまでもないが⁽⁶⁾、それは通時的に見て語義や語音に比べ語法の変化が少ないと考えてのことである。

②文の定義は主語Sと述語Pのあることだが、漢語の場合、述語動詞V・Pと目的語Oのある文が最もポピュラーな文なので〔S-V-O〕と略記する。

③多主語文（主述述語文）の大主語・小主語或いは主題語（時間詞や場所詞も含め）、また存現文の後置成分（主体語）、更に本来目的語であったものを提前したもの等はS・S₁・S₂…と

表記する。

④目的語Oには直接目的語O₁と間接目的語O₂の外、目的場所・対象物・手段・結果・原因理由等を言うものがある。古漢語では場所詞を目的語とする場合、前置詞「於」を置くのが普通である。

⑤補語Cとは動詞の補足成分か、「我没有饭吃」の「吃」のような成分を指す。もっとも、古漢語では殆んど存現文構造の主体語S₁で説明がつくと思われる。

幸い漢語の文は極めて単純で、述語には名詞・動詞・形容詞の三種類しかない。一見複雑に見える長文でも、いくつかの基本文型が鎖状に繋って出来上っているのである。

〔古漢語基本六文型〕

- 〔I〕 名詞述語文（主語述語共に名詞）〔S－N・P〕
- 〔II〕 動詞述語文（述語が動詞）〔S－V・P〕
- 〔III〕 形容詞述語文（述語が形容詞）〔S－A d j・P〕
- 〔IV〕 動目構造文〔S－V－O〕
- 〔V〕 多主語文〔S・S₁－P〕
- 〔VI〕 存現文〔S₂－V－S₁〕（Vは存現動詞）

主述文型〔S－P〕は世界の言語に共通する基本文型である。人間は自分の意志を相手に伝えたり、周囲の情景や状況を描写・伝達しようとする時、主語（話題・主体語・目的語の前置されたもの等）を初めに述べ、次いでそれらについて説明・陳述する。その時、述語が名詞であれば〔I〕、動詞であれば〔II〕、形容詞であれば〔III〕である。

〔I〕・大禹一聖人。

- ・聖人一百世之師也。
- ・生還者一僅三人而已。
- ・口耳之間一則四寸耳。
- ・項羽之卒一可十万。
- ・孟嘗君一特鷄鳴狗盜之雄耳。
- ・惟天地一万物之母、惟人一万物之靈。

一文の核となる語はすべて名詞で、助字の類を取り除くと基本形は〔S－N・P〕となる。

現代漢語の〔A是B〕構文を含めて、近年ようやく一人前となり、語学テキスト類にも登場するようになって喜ばしい。漢文の中でも肝要なこの名詞述語文がこれまでなぜ「認知」されなかったのか、その淵源を尋ねるといくつか思い当たる節があるが今は述べない。ただ、これに付随する問題として次の事を記しておこう。

否定の副詞「不」はこれまで動詞にのみかかると説明されてきたが、名詞述語文を認定した途端、それは名詞にもかかることになる。

・君－君，臣－臣，父－父，子－子。→君－<不>君，臣－<不>臣，父－<不>父，子－<不>子。

・直<不>百歩耳。

〔Ⅱ〕・花－開，鳥－啼。

〔S－V・P〕の時の動詞は多くが自動詞だが、古漢語では助字「於」を使い場所語を目的語の位置に置くことができる（往往にして「於」は省かれる）。今、それは〔Ⅳ〕タイプに含めて考える。

・兩箇黃鸝－鳴（於）翠柳。

・水－流（於）濕，火－就（於）乾。

〔Ⅲ〕・山－高，水－清。

・氣候－溫和，風光－明媚。

形容詞は本来目的語をとらないが、古漢語では場所や比較を示す助字「於」を使い、場所語や対象語を目的語の位置に置いて恰も動詞のような扱い方をする場合がある。

・霜葉－紅（於）二月花。

・良藥－苦（於）口／－利（於）病。

・苛政－猛（於）虎也。

・樂－<莫>大焉（於之）。

〔Ⅳ〕・仁者－愛－人。

人間が複雑な事象や微妙な感情を伝えようとすれば、勢い表現法も複雑微妙となる。しかし、相手の理解度を超える伝達表現法をとると本来の目的が元も子もなくなってしまう。

そこで、現代漢語の構文を見ると、〔S－V－O〕を中核として主語の前に数量詞や「定語」を置く。主語と述語動詞の間に介詞連語や「状語」や把字句或いは副詞、助動詞などを置く。動詞の直後に補語の類を「接辞」させ、最後に目的語を一二個持ってくるという形をとっていることが分かる。あとは「的」によって修飾・連結・確認の役割を果させ、各種の接続詞によって並列文や複文を作ってゆく。

再三述べるように、古代漢語も基本的に同構造〔S－V－O〕で、むしろ現代漢語より簡潔で凝縮された形をとっているとさえいえるのだ。せいぜい接続詞の類が多く、「於」や「以……為」の用語法が違っているに過ぎない。

その中で、特に韻文作品に頻出する構文は「連動式」と「S・V・Oの二重構造式」、「兼語式」である。

・寒雨連江夜入吳（連動式）

・唯見長江天際流 (S・V・O二重構造式)

・黃鶴樓送孟浩然之廣陵 (兼語式)

[寒雨S一連V一江O/<夜>一入V一吳O]

[〔我S〕<唯>一見V一O (長江S一流V一天際O)]

[〔我S〕<黃鶴樓>一送V一孟浩然O//S一之V一廣陵O]

[V] 現代漢語でいわゆる象ハナ文と呼ばれる主述述語文は、[VI] がいわば [II] の発展文であるのに比べ、目的語をとれない形容詞がその分を主語に加えて表現しようとするものである。但し、古漢文ではむしろ [I] [II] [IV] で多用され、形容詞で比較を表現する場合は助字「於」を使う構文にすることは既にみてきた。

・冰水為之 (而寒於水)。[S・S₁一V一O]

・管仲字夷吾。[S・S₁一NP]

・彼与彼年相若。[S・S₁一VP]

もちろん、これらの基本文型で処理しきれない漢文は数多い。「秦虎狼之國不可信」などは次のように分析してよいであろうか。

[〔秦S一虎狼之國NP〕S一<不・可>信V] [(I) II]

[VI] 落雷、降雨、立春、出水のような自然現象や突然起こった現象を客観描写するに得意な文型である。一見 [IV] に似ており、誤訳を誘引する横綱である。即ち両者の違いは、[IV] の目的語が [VI] では主体語になることである。昔、「天降雨」を「天 (ニ在ス神) ガ雨ヲ降ラス」とやって失笑を買った漢学者がいた。正しくは「天ニ雨 (ガ) 降ル」で、「降」は存現動詞である。

・天油然作雲、沛然下雨、則苗淳然興之矣。

[天S₂<油然>作V一雲S₁、<沛然>下V一雨S₁、<則>苗S<淳然>一興V<之矣>]

・秋衡山雨雹。[秋S₃・衡山S₂一雨V一雹S₁]

・股無腓、脛不生毛。[股S₂一無V一腓S₁、脛S₂一<不>生V一毛S₁]

尚、「今獨臣有船」は [IV] で、「有」は「保有する」意の他動詞である。「親朋無一字、老病有孤舟」は判断に苦しむところであり無理に解せずともよいが、客観描写性にポイントを置いて [VI] と看做せば「有・無」は「存在する・しない」という存現動詞となる。

「有兵守関不得入」は [〔関S₂〕一有V一兵S₁//S一守V一関O] [〔我兵S〕一<不・得>入V・P] [VI//IV II] と分析しておこう。

3. 「百里見秋毫」はどう訳すべきか

Guān Fàng Bái yīng / ハクヨウ はな み 李白
 観 放 白 鷹 / 白鷹を放つを観る 李白
 bāyue biānfēng gāo / ハチガツ ヘンブウたか
 八 月 辺 風 高、 / 八月 辺風高し
 ● ● ○ ○ ◎
 húyīng báijīnmáo / コヨウ ハクキンモウ
 胡 鷹 白 錦 毛。 / 胡鷹 白錦毛
 ○ ○ ● ● ◎
 gūfēi yīpiàn xuě / コ ヒ イッペン ゆき
 孤 飛 一 片 雪、 / 孤飛す一片の雪
 ○ ○ ● ● ●
 bǎi lǐ jiàn qiūháo / ヒヤクリ シュウゴウ み
 百 里 見 秋 毫。 / 百里 秋毫を見る
 ● ● ● ○ ◎

平仄式は〔仄起り平終り型〕。高・毛・毫が下平四豪の韻を踏む。

初句が下三平、転句が下三仄の禁を犯すが、全句を相殺すると平：仄＝10：10に戻っている。いかにも李白の作品らしく豪放磊落、一見ズッコケているようで実は細心の注意を払っていることが分かるのである。

〔八月S₂・辺風S₁—高Adj・P〕〔V・Ⅲ〕

〔胡鷹S—白錦毛N・P〕〔I〕

〔(空中S₂)—孤飛V—一片雪S₁〕〔VI〕

〔(S)〈百里〉—見V—秋毫O〕〔IV〕

「八月」を「四季のうち八月というこの時季」という話題提起S₂と考えれば、初句は本来の主述語句となる。

名詞述語句を認めなかった従来の語法観点から言えば、承句は単なる名詞の羅列である。しかし、この句を通釈すれば必ず「胡鷹ハ白錦毛デアル」と主述構造として捉える筈で、とりも直さず語法的範疇で捉えることを意味する。くり返しになるが、正しい解釈を導き出すためにはどうしても語法の助けを借りなければならないことの証左でもあるのだ⁽⁷⁾。

転句は初め〔一片雪S—孤飛V〕という〔II〕構造が平仄の関係で顛倒したものと考えた。しかし、それよりも自然現象を客観描写するに勝れる存現句として捉える方が恐らく作者の原意にも適っていると見た。くどくなるが、ここにも語法的観点を定めて解釈することの必要性和妥当性を見出すことが出来ると思う。

——旧暦「八月」といえばすでに秋も半ばすぎ、空は青く澄みわたり、ここ「辺」境山上の天「高」く秋「風」は吹き渡る。「胡」地産のわが精悍な「白鷹」は羽「毛」の「錦」模様も鮮やかに、眼光鋭く釈放の時を待ち構えている。結わえ紐を解かれた鷹は一瞬ばさっと羽撃いて、「孤飛」するさまは恰も「一片の雪」がふわりと空中に漂うかのよう。

結句「百里見秋毫」には以下の5種の解釈がある。一体どれが正解か。なぜそうであると言え

るのか。その証明法や如何。

イ、百里も遠く飛び去った鷹の羽の毛の先までも見える⁽⁸⁾。

ロ、瞬く間に百里先まで飛んでいった鷹そのものが秋毫のように見える。

ハ、山上から眺めると周囲あくまで澄みきって、百里先の秋毫まで見ることができる。

ニ、この胡鷹は百里先にいるどんな小さな動物をも見つけてとびかかるのだ。

ホ、寸刻の後、百里先の空中に毛筋ほどの胡鷹が現れ出た。

「百里」は言うまでもなく「遠い距離」の誇張表現である。当時の間尺に換算して（1里=200m）約20kmほどになるろうが、肉眼で小物体が見える限界であろう。

「秋毫」とは秋になって細くなった動物の毛先のこと。織毫、毫毛と同じく極めて微細なものを象徴する。

恐らくこれらの語釈と蕭士贇の注「明足以察秋毫之末而不見輿薪（『孟子』梁惠王上）」を参酌した結果、イ解が導き出されたのであろう。だが、蕭注は単に「秋毫」の用例を指摘したに過ぎないのであって、その意味までもここにあてはめよと言っているのではない。イ解の文を平静に眺めればすぐに気が付くはずであるが、推察するところ、これら誇張表現と相俟って自らを幻想の世界へ誘い込んだ訳文になってしまったものと思われる⁽⁹⁾。

イ解に疑念を覚えて筆者が考え出したのがロ解である。その後、ニ→ハ解を経て考察を深め、今回原点を立ち戻って結論を述べる次第である。

ハ解を支持するのは、杜甫の五律詩「山寺」である。その第8句は奇しくも本詩と同一表現句であり、常識的に考えれば同一解釈となる筈である。

Shān sì	山寺	／	山寺	Dù Fǔ	杜甫										
yě sì	野寺	cán sēng	残僧	shǎo	少	／	野寺	残僧	少	なく	〔V〕				
●	●	○	○	●											
shānyuán	山園	xì lù	細路	gāo	高	／	山園	細路	高	し	〔V〕				
○	○	●	●	◎											
shèxiāng	麝香	mián	眠	shízhú	石竹	／	麝香	石竹	に	眠	り	〔IV〕			
●	○	○	●	●											
yīngwǔ	鸚鵡	zhuó	啄	jīntáo	金桃	／	鸚鵡	金桃	を	啄	む	〔IV〕			
○	●	●	○	◎											
luànshuǐ	乱水	tōngrén	通人	guò	過	／	乱水	通人	過	り	〔VI／II〕				
○	○	○	○	○											
xuányá	懸崖	zhì wū	置屋	láo	牢	／	懸崖	屋	を	置	き	て	牢	なり	〔VI／III〕
○	○	●	●	◎											
shàngfāng	上方	chónggé	重閣	wǎn	晩	／	上方	重閣	の	晩	〔V〕				
●	○	○	●	●											
bǎi lǐ	百里	jiàn qiūháo	見秋毫	／	百里	秋毫	を	見	る	〔IV〕					
●	●	●	○	◎											

平仄式は〔仄起仄終り型〕。高・桃・牢・毫が下平四豪の韻。基本平仄式に照合すると第7句1字目「上」のみが平→仄となった一点瑕疵完整美型⁽¹⁰⁾作品である。但し、そう判断するのはまだ早計で、実はこの場合、第8句1字目を「平字」にすれば完全無欠となるのだが、「百」は実質上はなんと2声（平）に読むのだ。空恐ろしくなるほど万全の配慮が行き届いた完璧な作品といえよう。

——野寺すなわち詩題の山寺は、秦州東南麦積山上の瑞応寺という。その寺ではすでに残り少なくなった僧が連日勤行している。山園には細く高く続く小路。麝香鹿は石竹のもとに眠り、鸚鵡は金桃を啄んでいる。幾筋かの小瀑が集る乱水のあたりを誰か人が通り過ぎて行く。険しい崖の途中に造られた家屋は意外にしっかりしている。山頂上方の重閣に立つと、すでに夕方になったというのに、百里も遠方の秋毫の末まで見透せるほどすばらしい眺望であることだ。

ここでの「百里見秋毫」は麦積山上の方丈に立つ作者が、すでに陽も西に傾き夕方の気配漂う中、百里四方の微細なものが見えるほど清澄な景観であることを象徴的に表現したものである。

昔、筆者の研究発表に当り、恩師鈴木修次先生がこの「山寺」詩をあげ、強い語調でハ解を支持なさった情景を忘れない。

しかし、同一句なる故を以って同一解釈であるべしとする「常識」を李白詩に当て嵌めるとどうなるだろうか。

李白の詩は起句で「八月、辺風高し」と見晴らしのきく国境付近の山上で、青空高く強めの秋風が吹く状況を描写している。そのような時候、地点、作者の位置、周囲の景観を承けて、次にこれから解き放つ胡地産の優秀な鷹を紹介する。見事に成長したその白鷹がひとたび籠手から飛び立つとさながら一片の雪の如くふわりと空中に舞い上った。——そうして、改めて周囲を見渡すと、どんな遠くの小さな物さえ見えるほど清澄雄大な景観であることよと鷹のことはそっこのけにして山上の眺望のすばらしさを堪能する句になってしまうのだ。

李白はすでに起句でいわば廣大無辺の見晴らしのきく山上であることを示唆しており、結句でそのことをダメ押しする必要はない。且つ結句を常識の線で捉えると3句目までとの懸隔が甚しくておもしろくない。折角お膳立して得意気に紹介した鷹については我関せずとばかり腕組みして周囲の景観に見とれるという構図になってしまうわけだ。

では、この常識の線との矛盾はどうすれば解消できるであろうか。20年前、この矛盾が解けず、結局ハ解に屈してしまった筆者であった。今回、この壁を突破したところに思いがけず新展開が待ち受けていたのである。

二解は結句を〔(胡鷹S) <百里>見V - 秋毫O〕と考えた解釈である。曾て李白研究の大家・北京大学の裴斐先生にお尋ねした時、言下に「これが正解です」と答えられたことを想い出す⁽¹¹⁾。この解釈は主語を胡鷹に見たて最適訳のように見えるが、いくつかの無理がある。

①仮に鷹が目ざとく小動物を見つけたとして（それは鷹に聞いてみないと分からないのである

が)、その後の処置はどうなるのか。実はこの解釈は詩題の「放」を「鷹狩り」とする前提に立っているのだが、そうとすればなおのこと、百里もの遠方で捕えた小動物を鷹と鷹匠がどのように処理するか大いに気になるところである。

②「見」は漢語では日本漢語のような「発見」の意味で使われることはない。もし「発見」の熟語があったとしても、それは「fāxiàn」と読んで「現れる」意味になるのである。

当初、筆者も二解に左袒し論陣を張ったことがある⁽¹²⁾。「放」を「鷹狩り」とする歴代の注釈家の解説を鵜呑みにしたのが最大の失着であった。ところが、先年、ふとしたことからこの「放」は文字通り「釈放」の「放」であることに気付いた。この詩がもし鷹狩りの様子を詠んだものであるならば、鷹の飛ぶ距離はものの50m前後もあれば事足りるわけで、百里も飛んで行くともう「おさらば」以外にはないわけだ。

実はその事を、本詩に続く連作の「其二」（長短句、古詩形式）が夙に示していたのである。

hándōng shíèr yuè / 寒 冬 十 二 月、 / 寒 冬 十 二 月
cāngyīng bā jiǔ máo. / 蒼 鷹 八 九 毛。
jì yán yàn què mò xiāng zhuō, / 寄 言 燕 雀 莫 相 啁、 / 言 を 寄 す 燕 雀 相 啁 する こと 莫 かれ
zì yǒu yún jì wàn lǐ gāo. / 自 有 雲 霧 万 里 高。 / 自 ら 雲 霧 万 里 の 高 き 有 り

——昨寒冬の12月ごろ、始めて捕えられた蒼鷹はまだ青黒い羽毛の眼光鋭い若鳥であった。遠拳颯去することができぬよう八、九本の強い羽のくきを切り取られ、鷹狩りに活躍したのだった。その後、成鳥となり羽毛も純白となった鷹は、今日、野性に戻されることになった。解き放たれて、一瞬、空中へ舞い上がった様はまるで一片の雪のよう。胡地上空へ向け一気に百里も飛翔した白鷹は毛すじほどに見えたかと思うと、やがて視界から消え去っていった。

そこで燕や雀どもに言うておくが、決してこの胡鷹をあなどり嘲笑するようなことがあってはならないぞ。この白鷹こそ大いなる志を胸に大空万里の彼方めざし飛んで行くのであって、お前たちにその抱負など分かる筈もないのだから。

「燕雀安くんぞ鴻鵠の志を知らんや」「大鵬図南」の故事を、そして何よりも李白自身の高邁な思想を僅か数句の間に読み取る感じがするではないか。

かくして二解は語法的妥当性にも拘わらず、正解にはなり得ないことがはっきりしたわけだ。

これまで4種あった本句の解釈に、今回、別解を加えて5種とすることになった⁽¹³⁾。

ホ解は当句を存現句〔百里S₂—見（現Xiàn）V—秋毫S₁〕とみなす。これを支持するのは斛律金「敕勒歌」の結句である。

天蒼蒼 野茫茫 風吹草低見牛羊

即ち、結句の「風吹／草低〔Ⅱ〕」を一種の場所語S₂とみなし、「見現同じ」き釈義を活用す

るのである。〔風吹草低S₂—見V—牛羊S₁〕すると、この構造下での解釈ホ解は〔IV〕構造下での口解をいわば言い換えたものであることが分かる。両解が楕の両面となる所以は、「見see」≡「現appear」が鍵となる。そうして、結果的に酷似した解釈となる両解を峻別する役目は、いうまでもなくこの文法構造が荷っているのである。意志性の薄い「見る」という動作を表わすとは言え、他動詞「見」を使えば一句は〔IV〕、それを存現動詞「現」とみなせば一句は〔VI〕となるわけだ。

李白詩が庶民に親しまれ愛される所以も本作品が余すところなく明らかにしてくれる。誰にでも分かる語を用い、誰でも知っている故事を踏まえ、何と漢語の基本文型を総動員して作られていたのである。律詩形式（本詩）と古詩形式（其二）の運用もさることながら、その平仄式は自由奔放性と自己規律性を同時に内蔵し、恐らく朗誦すればその真面目を一度に発露させることであろう。五言絶句の〔仄起平終り型〕は押韻が難しいせいであろうが、〔仄起仄終り型〕に比べ極めて作品数も少ない変格型であり、ここでも作者の進取の気性を感じ取るのはそう難しいことではない。

本詩は李白の本領を存分に体現した、まさに「詩仙」の名に適しい高邁な詩精神を漲らせた作品だったのである。

結句「百里見秋毫」を同じくしながら、杜甫「山寺」は雄大宏大な景観の中で透視のきく清澄な佇まいを表現した静的景観描写句であり、李白のそれは広大な景観の中にスピード感・軽快さ・自由奔放性・高遠な思想等を一気に迸らせた動的景観描写句と言えるであろう。

同一句であれば同一解釈しかありえないという「常識」を打ち破り、「一分為二」の弁証法で一点突破した途端、詩聖と詩仙の対照的作品世界が躍り出てきた。そうして両巨人の作品世界を逆照射する形で、はからずも世に言う両巨人の特徴を検証することが出来たと思う。

そう言えば、杜甫にも同じく「鷹」をテーマにした五律詩「画鷹」があった。絵に画かれた鷹を詠んだこの作品は、上記の両巨人の特徴を更に存分に証言してくれるであろう。

Huà	Yīng	／	Huà	le	shì	Yīng	Dù Fǔ
画	鷹	／	画	かれ	し	鷹	杜甫
sùliàn	fēngshuāng	qǐ,	sùliàn	nǐ	fēngshuāng	qǐ	
素	練	風	霜	起	、	素	練に風霜起り
●	●	○	○	●			
cāngyīng	huàzuò	shū.	cāngyīng	huàzuò	shū.	／	蒼鷹 画 <small>な</small> き作すこと殊なり
○	○	●	●	◎			
sōngshēn	sī	jiǎotù,	sōngshēn	sī	jiǎotù,	／	身 <small>そびや</small> を攬かして狡兔を思い
●	○	○	●	●			
cèmù	sì	chóuhú.	cèmù	sì	chóuhú.	／	側目して愁胡に似たり
●	●	●	○	◎			

tāoxuàn guāng kān zhāi, / タウセン
 條 璇 光 堪 摘、 / 條璇は光りて摘むに堪え
 ○ ● ○ ○ ●

xuānyíng shì kě hū. / ケンエイ
 軒 楹 勢 可 呼。 / 軒楹に勢ひは呼ぶべし
 ○ ○ ● ● ◎

hé dāng jī fānniǎo, / いつ まさ
 何 當 擊 凡 鳥、 / 何か當に凡鳥を撃ちて
 ○ ○ ● ○ ●

máoxuè sǎ píngwú. / 毛血 平燕に灑ぐべき
 ○ ● ● ○ ◎

〔仄起仄終り型〕 殊・胡・呼・燕が上平七虞の韻。

第3・5句の1字目が平仄を逆にし救極されていないが、この両者で相殺されている。

第7句は特殊句型。第8句1字目のみが基本平仄式に違背した「一点瑕疵型完整美」作品である。

白い絵絹に冷たい風が巻き起こるが如く、
 蒼鷹は生けるが如く見事に描かれている。
 猛だけしく身をそばだててはしこく逃げる兔を狙い、
 横目に睨め付ける様は愁い顔の胡人に似ている。
 結わえた足の留金はピカリと光って摘みとれそう、
 呼べば軒端から今にも飛び立ちそうな格好だ。
 お前が凡百の小鳥どもに襲いかかり、
 その血と羽を荒野に散らすのはいつのことか。

おわりに

先年、李白の「静夜思」Aと「夜思」Bは、どちらを原作と看做せばよいか追求したことがあった。

A 牀前看月光〔(我S) <牀前>看V 一月光O〕〔IV〕

B 牀前明月光〔牀前S₂ 一明(「V」) 一月光S₁〕〔VI〕

Aは自己の動作・行為を陳述するのに得意な動目構造句で、しかも「看look」は「見see」に比べかなり意志性が強い。一方、Bは「明」を存現動詞の一種と考えれば自然現象を客観描写することに勝れる処動構造句である。

このように分析すれば既に勝負あったと言うべきで、語法の観点の重要性も逆証されていると言えよう。

過去、長い間決着を見なかった唐詩解釈異同説についても、この語法の観点を武器にして攻めればかなりの精確さで正解を求められることを実証してきた⁽¹⁴⁾。

例えば杜甫「春望」の次の句の正解を判定するに当って適用した語法はこうである。

烽火連三月〔烽火S—連V・三月C〕〔Ⅱ・補語〕

感時花濺淚〔(我S)—感V—時O／<(看)花>—濺V—淚O〕〔Ⅳ／<O>Ⅳ〕

上句の「三月」は目的語ととれば〔Ⅳ〕構造句で「弥生三月」の意味となる。時量補語とみなせば「三ヶ月間／何か月も」の意味になる。述語動詞の後にくる数量詞は殆んどの詩句で時量補語となる。

下句「感時」の主語は省略された「我」以外には考えられず、同時に「濺淚」の主語にもなる筈である。「花」を「濺淚」の主語とみなせば同時に「感時」の主語にもならなければならないわけだから、「花」を擬人化することになりおかしい。

このように、これまで諸先達の間でくり返されてききた議論に一拳に終止符を打つ展望が「語法の適用」によって開かれたと信ずる。

劉若愚氏が王維「漢江臨汎」A、李白「渡荊門送別」B、杜甫「旅夜書懷」Cの類似構想句をもとに、それぞれの作品世界と特徴を解説している⁽¹⁵⁾。今、語法的観点にポイントを置いて、これらを眺め直してみよう。

A 江流天地外、○○○●●〔S—N・P〕〔Ⅰ〕

山色有無中。○●●○○

B 山隨平野盡、○○○●●〔S—V—O—V〕〔Ⅳ〕連動式

江入大荒流。○●●○○

C 星垂平野闊、○○○●●〔S—V—O／S—V・P〕〔Ⅳ〕兼語式

月湧大江流。●●●○○

Aの「江流」は本来〔江S—流V〕〔Ⅱ〕であるが、この場合、次句の「山色」に合わせて2字の名詞（江の流れ）Sとなる。

名詞述語句は「長安—一片月」「白髮—三千丈」などが示すように、よけいな陳述語や説明語を加えず、いわば核になる単語のみを無造作に読者に投げかけて読者の発想を促し想像力に委ねるといふ、漢語の特色を最大限に生かした表現句である。言い換えると、感情や思想の微妙な陳述、情景のリアルな描写、事物の詳細な説明などには不得意だが、反面、抽象性、夢幻性、禪的雰囲気伝達には他構造句の追隨を許さないものがある。

連動式によって表現されたBは、文字通りの軽快なリズムを醸し出し、作者の卒直明快な性格、飄逸な人柄までも反映している。A Bとも下句1字目の平仄違反はご愛嬌といえようか。

重厚・精確・繊細・屈折・凝縮そして難渋等の語で評される杜甫の詩は、その名の通り句法上も兼語式構造句を多作する。杜甫詩の解釈が一筋縄ではゆかず、異同の説が頻出するのもここにその主因があるようだ。

Cは「平野／大江」がそれぞれ前半の目的語となり、同時に後半の主語になる。平仄上も1字の違反もない完璧作品である。

悠久広大な中国を対象とする学問研究・語学教育は如何にあるべきか。中国語・中国学界に身を置いて40年、その目的・姿勢・方法を真摯に問い続けた。近年、漸くその回答が得られ、いささかの提言も出来るようになったのではないかと考えている。

訓読批判に始まり、漢語の音読による読解を優しくも厳しく教えて下さった倉石武四郎先生。漢字語源追究の面白さ、漢語語法探索の楽しさを身を以て示して下さい下さった藤堂明保先生。両恩師の直接間接のご薫陶を前照灯にして、広大にして深淵な中国学の大海を迷いつつ惑いつつ「活到老、学到老」する外あるまいと観念している。

(注)

1. 早くは「唐詩における視点（作者の位置）について」九州中国学会 1980.5
近くは『『百里見秋毫』の解釈について』山口中国学会 2002.12
又、「关于古汉语的解读」浙江師範大学外国語学院での講演会 2003.12
2. 拙著『漢語入門（発音編）』『漢語入門（文法編）』白帝社 1989/1993
3. 拙論「漢文」と「訓読法」を論ず 『アジアの歴史と文化』山口大学アジア歴史・文化研究会 2001.5
4. 掃いて捨てるほどの誤訓誤読例であるが、ここではその正解例或いは解決法を示した拙著の中から数例のみを掲げる。『唐詩読解法』『尊孔論と批孔論』白帝社 2002.12
5. 漢字の本質を、字数が多い、字音が多い、字画数が多い、字義が多いの「四多」と、書くのが難しい、覚えるのが難しい、読むのが難しい、見分けるのが難しい、用いるのが難しい、検索するのが難しいの「六難」で表現するもの。
6. 2に同じ。
7. この問題に関連して、劉若愚著・佐藤保訳『新しい漢詩鑑賞法』大修館書店（1972）の劉氏の見解に対して「商榷」したことがある。『山口大学文学会志』第51巻 2001.2
8. 武部利男注『李白上』岩波中国詩人選集 P.163 1957.11
大野実之助著『李太白詩歌全解』早稲田大学出版会 P.1636 など。
9. これに類似した現象は数多い。拙論「唐詩に現れた『帯』の解釈について」鹿児島大学教育学部研究紀要第30巻 1979.3
10. 基本平仄式そのままではなく、一個所のみ違背させて「完整美」を狙ったものと解し名付けてみた。
11. 1984年、北京に留学中、裴斐先生の唐詩講義を拝聴した。他に鈴木虎雄博士がこの解の支

持者である。『李太白詩集下』續国訳漢文大成 P.565

12. 拙論「百里見秋毫」の解釈について『漢文教室』大修館書店 1980.11

13. 1のハに於いての浙江師範大学外国語学院日語系3年1組王莹さんの提言による。

14. 松浦友久編『唐詩解釈辞典』『(続) 同』大修館書店 1987/2001がそれら多くの異同の説を集め詳細・綿密な考証を加えている。筆者は正解を求めるに当り、語法の観点が決定的打となることを挙例して示した。→注4

15. 注7に同じ。

浙江師範大学外国語学院日語系專家楼にて

2004年甲申春節識